

CTHULHU

リチャード A は右手に L85A1 突撃銃、左手に手榴弾を持って横転するランドローバーを飛び出した。ジャングルの中を機関銃弾が降り注ぎ、迫撃砲弾が炸裂した。

とりあえず大木の陰に身を伏せ、無線に喚いた。「皆、無事か？」

チームの各員から返信が来る。

「こちらアッシャー、無事です」

「ジャンゴだ。おれは無事だが、リトル・ジョンがやられた！」

「リトル・ジョンどうした、応答しろ」

「こちらリトル・ジョン……足をやられました。行動不能」

「残念だな。見捨てていくぞ」リチャード A は言った。

「おれたちに大事な任務があるんでな」アッシャーは言った

「お前は装備を欲張りすぎて、動きが鈍ったな」ジャンゴは言った。

「がんばって、世界を救ってください」そう言ってリトル・ジョンは沈黙した。

「アッシャー、ジャンゴ、位置を知らせろ」

「アッシャーです。吹っ飛んだローバーの右側にいます。ジャンゴもすぐ後ろに」

「おれは左にいる。そこから敵が見えるか？」

「ええ、前方 100 メートルほどの所に、迫撃砲陣地があります。周囲に AK-47 を持ったゲリラが三名ほど」

「よし、お前はそこから援護だ。おれとジャンゴで左右から突っ込む。いいな」

「アッシャー了解しました」

「ジャンゴ了解」

アッシャーが M-60 機銃を撃ち始める。同時にリチャード A は走り出した。

少し遅れてジャンゴも姿を見せた。手にはロシア製の PPsh 短機関銃を持っている。

リチャード A はゲリラの一人を射殺し、手榴弾を投げ込んで迫撃砲を吹き飛ばした。

残りのゲリラ二人はジャンゴが片付けた。

そこから三人は徒歩で前進した。しばらく進むとジャングルが途切れ、前方にの巨大な建造物があった。黒い石造りであちこちがツタやコケに覆われていた。

それは太古の文明の遺跡だった。全体の意匠はアンコールワットを思わせたが、仏像の代わりにイースター島のモアイ像のようなものが各所に埋め込まれているのが異様だった。

「どうやら、《モスマン》はこの中のようだな」リチャード A が言った。

その時、遺跡の中で爆発音が響いた。たちまち機関銃射撃の応酬が巻き起こる。

「ちっ、他のチームに先を越されたな」ジャンゴが言った。

「もうタイムリミットも近い。とにかく中へ入ろう」

「しかし、トラップの確認をしないと」アッシャーが言った。

「時間がないと言ってるだろうが」とジャンゴ。

「だったらあんたが先頭で進むか？」

「それでもいいぜ、そのかわり報酬は余計にもらうぞ」

結局、ジャンゴ、リチャード A、アッシャーの順で三人は遺跡の中へ入っていった。

《モスマン》というのは、垂直離陸機能を持つ新型のステルス偵察機のコードネームである。アメリカ軍によって極秘裏に開発されていたものだが、この機体がテスト飛行中に行方不明になった。数日後ある国

際テロ組織から米国政府にメッセージが届けられた。VTOL ステルス機モスマンはこの組織によって捕獲されていた。その上、この機体に搭載可能な核ミサイルをロシア・マフィアを通じて入手しているという。テロ組織は 12 月 25 日午前 0 時までには 10 億ドルを支払わなければ、世界中のどこかの都市が消滅することになると脅迫してきた。このため秘密機関 AXE のエージェントたちに《モスマン》奪還とテロ組織殲滅の緊急指令が下されたのだった。

そしてリチャード A をリーダーとする彼らのチームはロンドン、香港、ジャワと手がかりを追って、ついに《モスマン》が隠されたこの遺跡までたどり着いたのだった。当初六人いたメンバーも今では半分に減ってしまっていた。

遺跡の中を走る三人の前方に UZI 短機関銃を持ったゲリラ二名が現れた。
「撃ちまくれ！」リチャード A が叫んだ。

三人が発砲するとゲリラ二人は撃ち返す間もなく倒れた。
「見る、トラップなんか無えじゃねえか」ジャンゴが言った。

その先は中庭のような広間になっていた。機関銃を積んだジープが走り回り、激しい銃撃戦が展開されていた。

「どうします？」アッシャーが指示を求めた。

「乱戦だな。固まってるとかえって標的にされるぞ」とジャンゴ。

「そうだな。散開して各個で戦闘、それしかないだろう」

「ようし、戦闘開始！」そう叫んでジャンゴは飛び出していった。

「じゃあな、生き残れよ」とアッシャーに声をかけリチャード A も戦闘に加わった。

後はひたすら走り回り、敵を見分けて銃撃、それだけだった。

戦闘は十数分で終息した。その場にいたゲリラは全滅した。

リチャード A のもとへアッシャーが駆け寄ってきた。

「無事だったか。ジャンゴは？」

「ジャンゴは死にました」

「そうか」

そこへ他のチームの生存者が合流してきた。生き残っていたのは、二人だけだった。

一人はローニン 361 という名の長身の男で装備は MP-5。もう一人はローズ X という名のオートマグを持った少女兵士だった。

「四人か。《モスマン》はどこかわかるか？」リチャード A は尋ねた。

「多分その階段の上だ。進めるのはそっちだけだからな」ローニン 361 が答えた。

そこには南米のピラミッドのような石の階段があった。

「そうか、誰から行く？」

「よければ、おれから」ローニン 361 が先頭を買って出た。

「じゃあ、私二番手で」とローズ X。

二人は階段を昇り始めた。

「お先へどうぞ」とアッシャーが言い、リチャード A が三番目に進んだ。

「まだ、敵は残ってるはずだ、警戒しろよ」

何事もなく一行は屋上に着いた。そこは広大な庭園になっていて、中央に黒い蛾のようなステルス機の姿が見えた。

「あった。《モスマン》ね」ローズ X が歓声を上げた。

その時「うわっ」と後ろからアッシャーの叫ぶ声が聞こえた。

見るとアッシャーは首から血を吹きだして倒れるところだった。その背後には黒いマスクで顔を隠した男が立っていた。手には大きなナイフが握られていた。

リチャード A は即座に L85A1 の銃口を向けその男を射殺した。だが、リチャード A の背後にもナイフを持った男が忍び寄っていた。ナイフの刃が首を狙ってくるのを何とか体をそらしてかわしたが、右肩の肉を大きく抉られた。

同時にローニン 361 とローズ X も同じように背後から襲われていた。ナイフだけを使う格闘戦に特化した敵らしい。

ローズ X は最初の一撃を前転でかわしオートマグを向けたが不発のため正面から首を斬られてしまった。

ローニン 361 は背負い投げで暗殺者を石の床に叩き付けた。

リチャード A は何とか突撃銃の銃床で敵のナイフを防いでいたが、肩の傷からの失血でみるみる体力が低下していた。そこへローズ X を倒した敵まで彼のほうへ向かってきた。

だがその危機をローニン 361 が救った。彼は回し蹴りと空手チョップの連続技であっという間に二人の敵をノックアウトした。

「ふう、助かった。ありがとよ」リチャード A は礼を言った。

「傷は大丈夫か？」

「ああ、動けないほどじゃないが、右手が使えない」

「そうか、ここで休んでいろ。おれは《モスマン》を見てくる」

ローニン 361 は歩き出し、黒い偵察機へ近づいていった。

時計を見るとグリニッジ標準時では間もなく 12 月 25 日の午前 0 時になるところだった。

その時、銃声が響いた。ローニン 361 は倒れた。額の中央を撃ち抜かれていた。

偵察機の影に銃を持った人の姿が見えた。リチャード A が左手に L85A1 を持ち変えたところで敵が撃ってきた。右太腿と左胸に銃弾を受け、彼は倒れた。

胸の銃弾は掠っただけだ。だが立ち上がることはできなかった。

「ふんアメリカめ、スパイなど送り込みおって、もう時間切れだぞ」

そう言いながら機体の影にいた人物が姿を見せた。軍服を着た無毛症らしい禿頭の太った男で、手には銃身の長い砲兵タイプのルガー P-08 を握っていた。それは国際テロ組織の首領として指名手配されているドクター・バーロウだった。

「思い知るがいい、資本主義者ども」

ドクター・バーロウは自ら《モスマン》で出撃する気らしい。パイロット用のヘルメットを持ち出してきて頭にかぶった。

リチャード A は倒れた姿勢のまま何とか左手だけで L85A1 の照準をあわせた。

ドクター・バーロウがコクピットに乗り込もうとしたところを短く連射された銃弾が襲った。狙い通り正確にテロリストの心臓を撃ち抜いた。バランスのいいブルパップ式の突撃銃を選んでいたので幸いだった。

リチャード A は血を流しながら、這うように《モスマン》に近づいていった。ひどい眩暈がして今にも気を失いそうだった。

長い時間をかけてやっと偵察機にたどり着いた。何とか立ち上がり機体に手を触れた。

その途端、目の前にオレンジ色に輝く文字が浮かんだ。

Mission Complete!

と。

網野秋典は richard_A に経験値が加算されたことを確認して、ゲームからログアウトした。

「もうすぐレベルアップだな」そう言って机の下のコンビニ袋に手を突っ込んだが、中にはゴミしかない。

時計を見るとちょうど午後3時だった。

パソコンをスタンバイにすると、財布をポケットに入れて部屋を出ようとした。

「おっと、節電、節電」と、リモコンでエアコンを止めてから外に出た。

Tシャツにジーパン、裸足にサンダル履きという恰好だった。マンションからコンビニまで5分ほどの道のりである。

「うう、寒いな」思わず体が震えた。

いつの間にこんなに寒くなったんだ、秋典は思った。そうか、もう10月だったかな。

コンビニについて三日分ほどの食糧を買い込んだ。

帰り道もやはり寒さが身に沁みた。

しかしまてよ、おれはこんな寒い日に冷房の効いた部屋でTシャツ一枚でゲームをつづけてたんだろうか。いや、そんなばかなことがあるはずがない、あのエアコンは自動的に暖房に切り替わるタイプなんだろう。

秋典は今年の五月に今のマンションに引っ越してきたばかりなので、エアコンの機能などよく理解していなかった。

会社を辞めて、もうすぐ半年になる。その間、外出といえばコンビニに食べ物を買いきただけで、部屋にいるあいだはずっとネット・ゲームに没頭していた。睡眠をどれくらい取っているのか、自分でもよくわからなかった。

秋典はマンションの部屋へ戻ると、ドリンク類を冷蔵庫へ入れ、食べ物を片付けるとエアコンのスイッチを入れた。

冷房なのか暖房なのか確かめようと送風口の下に立っていた。風は出てくるが、それが冷たいのか暖かいのかよくわからなかった。そのうちどうでもよくなって、パソコンを起動させ、すぐゲームにログインした。

今彼が熱中しているのは THE KILLM@STER online というゲームだった。

プレイヤーは世界の平和をまもる秘密機関 AXE のエージェント “キルマスター” としてテロリストと戦うことになるのだった。

上司であるニック・カーター大佐から指令が下された。richard_A の次の任務はテロリストの毒ガス工場を見つけ出し爆破することだった。それから秋典は夜遅くまでゲームに没頭していた。

今回はあまり活躍はできなかったが、とにかく最後まで生き延びることは出来た。

経験値を稼いでレベルアップできた。

少し息抜きをしたくなった。KILLM@STER に集まるプレイヤーは戦闘に夢中になるタイプが多く、あまり無駄話などは好まない。そんなところが秋典は気に入っていたのだが、時には馴染みの連中と会話したくなることもある。

そこで以前よくやっていた『ファイティング・ファンタジー・オンライン』というゲームにログインした。

剣と魔法の世界だ。ハンドルネームは同じ richard_A である。彼は〈バルサスの酒場〉へ直行した。そこは冒険者がパーティーを編成するための場所だったが、単なる無駄話のためにたむろしている者も多かった。

彼が酒場をうろついていると MAD_pierrot が声をかけてきた。

MAD_pierrot : おい、richard_A。久しぶりじゃないか。

richard_A : ああ、MAD_pierrot か。

MAD_pierrot : 最近なにしてるんだ？ 全然来なかつただろ。

richard_A : ずっと KILLM@STER にはまってる。

MAD_pierrot : あんなの軍オタばかりだろ。

richard_A : おれは気に入ってる。

MAD_pierrot : たまにはここへも来いよ。

richard_A : ここも頭打ちだしな。そうだ、Pink † Pandora はどうしてる？

そう、彼がこの『ファイティング・ファンタジー』に熱中していた時は、richard_A、MAD_pierrot、Pink † Pandora この三人で常にパーティーを組み、レベル 99 と全ステージ踏破、全アイテム・ゲットを目指して日夜戦い続けていたのだった。やがてそれはゲーム内でも有名な伝説の最強チームとして知られるまでになった。

MAD_pierrot : Pink † Pandora か、彼女も変わっちゃったよ。

richard_A : 変わったって、どう？

MAD_pierrot : お前も、あの画像を見て会いに来たんだろ？

richard_A : は？ 画像って何の話だよ。

MAD_pierrot : 知らないのか。彼女がネット上に素顔を晒した画像だよ。

richard_A : 全然知らん。おれはネットだってゲームしかやらないからな。

MAD_pierrot : じゃあ、ググってみな。少し前まで、すごい美少女だって話題になってたんだから。

Pink † Pandora が、すごい美少女……？

秋典も Pink † Pandora が女の子だということは知っていた。だが、外見がどうかなんてことは気にしたこともなかった。ゲームの中では戦力になるか、ならないか、それがすべてだからだ。とにかく彼女は最高のパートナーだった。それがチーム三人ともレベル 99 に達したのを機に彼女は少しの間ゲームを休むと言い出し、姿を見せなくなった。その後、しばらくは MAD_pierrot と二人で冒険をつづけていたが何となく盛り上がり欠けて、どちらからともなくこのゲームから去っていたのだった。

richard_A : で、今どうしてるんだよ彼女？

MAD_pierrot : 噂によると「カオス・クロラ」とかいうゲームにいるらしい。

richard_A : 知らんな、そんなゲーム。

MAD_pierrot : もう長いことβ版のまま、招待制らしい。

richard_A : 招待制か。Pink † Pandora がいるならおれらも招待してくれないかな？ そっちのゲームでまた三人でチームを組むのもいいじゃないか。

MAD_pierrot : いや、おれは行かないよ。あのゲームは悪い噂があるんだ。

richard_A : どんな？

MAD_pierrot : つづけていると鬱になるとか、気が狂うとか、廃人製造機なんて呼び名もあるくらいだ。

richard_A : まさか、たかがゲームだろ。

MAD_pierrot : ああ、ただの噂だろうがな。それよりおれはここが気に入ってるんだ。新しいチームも出来たしな。

richard_A : そうか、じゃあ仕方ないな。

秋典はゲームからログアウトした。

そして Google を呼び出し「Pink † Pandora」で検索してみる。

すると「美少女すぎるネットゲーマーの Pink † Pandora ちゃん」とか「Pink † Pandora ちゃんが可愛すぎて死にたい」など、いわゆる“まとめブログ”にいくつもの記事があった。

適当に一つを開いてみると、画像があった。たしかに美少女だ。外見からは、まだ中学生ぐらいに見える。すっぴんの白い肌に短めにそろえた黒髪、猫のプリントのついた T シャツを着た上半身が写っていた。どのページも画像は同じ一枚だけで、書き込みはくだらないものばかりだった。顔写真を公開することに

なったのは、Pink † Pandora がよく書き込んでいた掲示板上で、会話の流れで自然とそうならしい。

つぎに「カオス・クロラ」というゲームについても検索してみた。

最初に無名掲示板の「カオス・クロラはヤバイ!？」というスレッドがあった。

開いてみると。始めの方に「これマジでやべえよ!」「どんなゲームだよ?」「ほんとに鬱になった」などの書き込みがされていたが、途中から、人種差別的な文章のコピペや、下品な AA の連投で掲示板の態をなさなくなっていた。

次に公式ページを見つけ開いた。

そこには「現在β版によるテスト中です。正式版リリースまでもうしばらくお待ちください。」という素気ない文章があるだけだった。だが、よく見ると下のほうに運営会社の名前があった。それはマジック・ランタン・ネットワーク社だった。

マジック・ランタン・ネットワーク社ならば、秋典が会社員だった頃何かと話題になっていたのによく知っている。

この会社は、お台場の自衛官乱入事件と粉飾決算疑惑で日本からの撤退を余儀なくされたライブクラフト社を解体した跡地に建てられた巨大な黒いピラミッド型の社屋がまず注目を集めた。事業内容は映像配信をはじめ各種ネットサービスが中心だったが、少し前には、あの不味いことで有名で、何かと不穏な噂も絶えなかったファミリー・レストラン・チェーン〈マーシュ船長のフライド・フィッシュ〉を吸収合併して〈エンジェル・ラグーン〉という新たなファミレスに生まれ変わらせたことでも知られていた。その他、最近では映画制作やアイドル・グループのプロデュースまで手がけていたはずだ。

他のサイトも覗いてみたが、噂の域を越えるような情報は見つからなかった。

しかし、Pink † Pandora がこのゲームにはまっているというのは気がかりだった。それは彼女が美少女であることを知ったからというのではない。とにかく、また彼女とチームを組んでゲームをやりたい、いつの間にかそんな気持ちが無性に高まっていた。

秋典は『ファイティング・ファンタジー・オンライン』に再度ログインした。

プレイヤーのプロフィール・ページで Pink † Pandora を検索した。彼女の ID はまだ生きていた。メッセージ機能で次の文章を送った。

〈「カオス・クロラ」をプレイしたい。

もし ID を持っていたら招待してくれないか?〉

もう、KILLM@STER に戻る気はなくなってしまった。

しばらくぼんやり待っていたが返信はなかった。

久しぶりにゆっくりシャワーを浴びて、その夜は寝てしまった。

翌朝目を覚ましてパソコンを起動すると、メールが一通届いていた。

差出人は「カオス・クロラ運営部」とある。

内容は〈Pink † Pandora さんがあなたを「カオス・クロラ」に招待しています。〉とあり、その後ゲームについての説明と登録手続きのための URL が記されていた。

秋典は早速リンク先にアクセスし、お決まりの必要事項を書き込んだ。ID はやはり richard_A にした。このハンドルネームは、むかし図書館でたまたま手にした小説で、主人公の名がリチャード・アキノというものがあつた、それを読んで以来彼は自分の変名としてリチャード秋典と名乗るのを好んでいたのだった。

手続きを一通り終え、いよいよゲームにログインした。

「カオス・クロラ」は六本脚の戦車で歩き廻りモンスターを倒していくゲームだった。画面の中央には遠近法による擬似的な三次元空間が表示され、右下には地図のようなものが、左側には各種データが表示されるようになっていた。戦車を動かすと、ちょうど、カー・ナビを見ながら車を運転するような感じになる。武装は回転する砲塔に機関砲が一門あるだけで操作に迷うことはなさそうだ。レベルアップすれば武器は増やせるのだろう。戦車は最初、装甲の色を自由に選ぶことができた。秋典は戦車らしくデザート・イエローとダーク・グリーンの迷彩塗装にした。

とにかくゲームをはじめることにする。地図は縮尺を自由に変えられるので、できるだけ広範囲を表示してみる。秋典の戦車が今いるのは、さして大きくもない島の西端だった。砲塔を旋回させてみると、すぐ後ろは崖でその向こうは海だった。

地図を見ると南のほうに黄色の点が点滅していた。多分これが敵の位置だろうと思い、そちらに向かった。草原をしばらく進むと前方に巨大な赤い花びらをもつ食虫植物のような怪物がいた。ある程度まで接近しとりあえず機関砲で攻撃してみる。

怪物は花の中央の口から火の玉を吐き出した。戦車は一撃で破壊されてしまった。

すぐに戦車は再生し、最初の島の西端の地点で復活した。

花の怪物には勝てそうもないので、今度はまっすぐ東へ進む。島の東端は波の打ち寄せる砂浜だった。しばらくその辺をうろついてみるが何も起こらない。

地図を見ると、北側のほうに黄色い点がいくつも現れていた。そっちへ行ってみる。北のほうは岩山になっていた。前方に小さなクラゲのようなものが空中に浮かんでいた。白い体の中心に黒い爆弾らしきものをぶら下げていた。機関砲で撃つと派手に爆発した。

さらに三体、浮遊する爆弾クラゲがあらわれた。砲撃で二体を爆発させた。残りの一体は視界から外れた。砲塔を旋回させると、そこにも三体爆弾クラゲが連なっている。そいつらもまとめて爆発させた。だが、すぐに五体ぐらいがまとまって近づいてくるのが見えた。

地図を見ると、いつの間にか戦車の周囲は黄色い点に取り囲まれていた。包囲の輪はどんどん狭まっていた。砲塔を旋回させながら撃ちつづけたが、ついに爆弾クラゲは戦車の装甲に触れた。すると周囲のクラゲすべてが連鎖して誘爆し、戦車を吹き飛ばした。

島の西端から再スタート。今度は、西の崖沿いに南下する。いちど南の端まで行って北上する。花の怪物の背後を突く作戦である。

うまく怪物の背面へ出た。攻撃を加えると、花の頭部が振り返って火の玉を吐いた……。

すぐ西端で復活する。だがどうすれば……。花の怪物にも爆弾クラゲにも勝ち目はなさそうだ。隠しアイテムでも探せばいいのか。いや、まてよ……！

戦車を北の岩山へ向かわせた。しばらくすると爆弾クラゲがあらわれた。すぐに南へ向かう。クラゲは数を増やしながらか追ってくるが、スピードはそう速くない。花の怪物の前まで来て、すぐ横をすり抜ける。案の定こちらから攻撃しなければも怪物も攻撃してこない。旋回してしばらく待つと、爆弾クラゲが集まってきた。クラゲの群れが花の怪物に近づいたところで砲撃する。爆弾が連鎖誘爆して、花の怪物も吹き飛んだ。

ポイントを獲得した。地図を見る。敵は全滅したようだ。東の浜辺に白い三角形が点滅していた。そこへ行ってみる。

砂浜に黒い潜水艦があらわれていた。艦首が開きタラップが伸びていた。そこへ戦車を載せると、あと

は自動的に内部へ導かれた。ハッチが閉まり、潜水艦は海へ潜っていった。画面は深度表示のグラフィックに切り替わった。

海底の洞窟内にある基地へ戦車は降ろされた。工場のような所で与えられたポイント分だけ戦車の改造ができた。ポイントは連装ロケット・ランチャーと装甲の強化に使った。

ゲートを抜けると新たなステージに出た。そこはがらんとした薄暗い格納庫のような空間だった。床に B100F という表記があった。地下百階という意味らしい。

はじめて別のプレイヤーの戦車と出会った。派手なオレンジ色の装甲で砲塔の左右にミサイルを三発ずつ装備していた。近づくと salamander という ID が表示された。

salamander:おまえは新入りだな？

向こうから話しかけてきた。

richard_A:ああ、このゲームではな。

salamander:悪いことは言わん。このゲームはやめておけ。

richard_A:なんでだ？

salamander:そのうち気が狂うぞ。

richard_A:鬱になるっていうんだろ。

salamander:それだけじゃ済まない。自殺した奴もいるらしい。

richard_A:ただの噂だろ。

salamander:噂じゃない。行方不明者も大勢いる。

richard_A:そうか、まあ気をつけるよ。

先へ進もうとすると salamander の戦車が進路を塞いだ。

salamander:待て、おまえのためを思って言ってるんだぞ。

richard_A:どいてくれないか。

salamander:どうしてもやめない気か？

richard_A:ああ。

salamander:ならば、仕方がない。

salamander は至近距離から発砲してきた。

richard_A:おい、やめろ！

装甲耐久力のゲージがみるみる減っていた。このゲームはプレイヤー同士でも殺しあえる仕様なのだ。

反撃する間もなく撃破されてしまった。

工場内で復活した。ポイントがないので改造パーツは使えない。

ゲートを出ると待ち構えていた salamander がミサイルを撃ってきた。死亡。

復活。ゲートが開く。ミサイル。死亡。

復活。このループがえんえん続くのかと思ったが、ゲートが開くと salamander は、別のグレイの都市迷彩の戦車と激しく撃ち合っていた。その隙にエレベーターに乗った。B99 から B91 までのフロアがあった。とりあえずひとつ上の B99F で降りてみる。

そこはやたらと配管がめぐらされたスペースで巨大なゴキブリが何匹もいた。不気味なだけで苦もなくクリアできた。

とにかく一階ずつ上って行くことにする。B98F は床に棺桶がいくつも並べられていて、そこから次々にゾンビが出てきたが、さしたる強敵ではなかった。

B97F は、廃工場のような場所で、スクラップで組立てられたロボットが敵だった。

ロボットを倒してエレベーターに乗ると、都市迷彩の戦車がいた。戦車二台が乗るスペースは十分にある。

bishop という ID が表示されていた。

richard_A: さっきは助かったよ。

bishop: ?

richard_A: あのオレンジの奴。あんたが引きつけていてくれたんで抜けられた。

bishop: ああ。B91 に強敵がいて、装備を変えるために下へ戻ったんだ。

richard_A: 何なら、そいつ協力して倒そうか？

bishop: いや、おれは一人で集中したいんだ。悪いが付いてこないでくれ。

richard_A: そうか。じゃあな。

bishop は B91F でエレベーターを降りた。秋典は B96F へ戻った。

そこは植物園のようなフロアで強酸性の麟粉を撒き散らす蝶が敵だった。多少ダメージを受けたが、これも手強い相手ではない。

一階づつ上るのも面倒になって B91F へ行ってみる。そこにいたのは身体を透明にして体当たりしてくる巨大な豚だった。二度の体当たりで戦車は破壊されてしまった。

工場で復活する。今度はポイントを稼いでいたので、連装ロケット・ランチャーと熱源センサーを装備する。

ゲートが開いて、オレンジ色の戦車を視認すると同時に、ロケット・ランチャーを連射する。salamander は一瞬で粉砕された。

ロックオンの手間がかかるミサイルよりも、面制圧用で狙う必要もないロケット・ランチャーのほうが素早く攻撃できるのだった。

B91F へ。熱源センサーのおかげで、透明豚も簡単に撃破できた。

別のエレベーターで B90F へ上れる。そこは新たなセーブ・ポイントなのでもう salamander に悩まされることもなくなりそうだ。

そこから先は順調に進んだ。適当に二三階づつ飛ばしながら昇っていった。

敵は、両手がドリルのロブスターや、全身包帯だらけの猫とか、砲塔のついた貝に入ったヤドカリ、バイクのエンジンをつけたピラニアなど様々だった。倒すのに工夫の必要な敵もいれば、ひたすら火力で压すのがいい場合もあった。

まだ、プログラムにバグがあるのか無意味な挙動をするキャラクターや、あり得ない角度でつながった空間などもあった。他のプレイヤーはあまり見かけなかった。出会ったプレイヤーには Pink † Pandora を知らないかと尋ねたが、誰も知らなかった。

B65F で bishop の戦車と再会した。だが、都市迷彩の戦車は壁の方を向いたままで、呼びかけても反応しなかった。ゲームにログインしたままプレイヤーが眠ってしまう、いわゆる“寝おち”と呼ばれる状態だろうか。その階は飛ばして先へ進んだ。

B49F では別のプレイヤーが話しかけてきた。レーダーやセンサー類ばかりを強化したグリーン of 戦車で ID は kandata といった。

そこは白いタイル張りの壁の明るいフロアで、とりあえず襲ってくる敵はなかった。

kandata: おい、おまえ、ティンダロスの猟犬を見たことがあるか？

richard_A: いや、知らないけど。

kandata: いあ！ いあ！ しゅぶ＝にぐらす！ ではじまる呪文を聞いたことは？

richard_A: ないな。

kandata: では、おまえに大切なことを教えてやろう。よく聞け。

richard_A: 何だ。

kandata: 冥王星のことをユゴス星と呼ぶ奴らがいる。

そう言った途端、kandata は画像が一瞬歪んだかと思うと、かき消すように姿が見えなくなりました。

敵の攻撃かと警戒したが、しばらく経っても何も起こらなかった。

バグだろうか。自分のキャラクターがあんなふうにならなくなると秋典は思ったが、とりあえず、先へ進むことにした。

B20F を越えたあたりから、さすがに強敵が多くなって来る。

もはや一度で敵を倒せることはほとんどなくなって、何度もセーブ・ポイントで装備を選びなおさねばならなくなった。

レベル 30 に達したのを機に休憩することにする。ずいぶん長いことゲームに夢中になっていた気がした。時計を見ると針は 3 時を指している。午後 3 時か。いつの間にか食べ物もなくなっている。またコンビニへ買い物へ行くことにした。

外へ出ると空が真っ暗なので驚いた。時計は確かに 3 時だった。するとあれは午前 3 時だったのか。その上、気づけばまた T シャツ一枚で出て来ている。今は 10 月、いやもう 11 月だったかな。

あの「カオス・クロラ」は廃人製造機などと呼ばれているらしいが、さすがにこれはまずいぞと秋典は思った。部屋に戻ったら今後の人生をじっくり考え直さねば……。

B1F の敵、上半身が鷲で下半身がイカというモンスターはかなり強敵だった。このフロアとセーブ・ポイントと、もう何度往復したか知れない。それでも何とか度重なる装備の変更を経て、敵の攻撃のタイミングを見切り、有効な攻撃方法を見出した。

ついに敵を倒し、地上へ出た。レベルは 44 にまで上っていた。

そこは砂漠の真ん中の飛行場だった。戦車はここで大きなローターを取り付けられ、ヘリコプター型に改造された。広大な砂漠を飛び回り敵を探すのだ。

空を見上げると、空中に幾つもの島が浮かんでいた。そのさらに先をジェット機が編隊を組んでドラゴンを追っているのが見えた。ヘリではあの高度まで燃料が持たない。まだ先は長いらしい。

砂漠でも幾多の敵と戦った。翼を持つ猿たち、竜巻を呼ぶ羊、鯨のように巨大なナメクジ、口からレーザーを出すライオン……。

レベルが 75 まで上ると黒い飛行船が迎えに来た。飛行船はヘリ型戦車を収容すると飛行島のひとつに運んでいった。航空母艦のような滑走路のある島だ。そこで戦車はジェット戦闘機に改造された。機体のカラーリングはデザート・イエローによるロービジ塗装。主兵装はバルカン砲にした。

ジェット機型になって初めて空へ出た時は、すぐにプテラノドン型の怪鳥に襲われ撃墜されてしまった。何度やってもうまくいかない。風にあおられまっすぐ飛ぶことすら出来なかった。

何度目かにプテラノドンが近づいてきた時、誰かがそれをレーザーで撃ち落してくれた。見ると黒い機体の戦闘機が上空を旋回していた。礼を言いたかったが、機体の安定を保てなかった。

Pink † Pandora:何やってるのよ richard_A ! 気流を読むのよ。

ID を見て驚いた。

richard_A:ピ……、Pink † Pandora !

Pink † Pandora:モニターの周囲に青い V 字のマークが出るでしょう。それが気流計よ。

richard_A:そうだったのか。いや、それより君は……。

Pink † Pandora:レベル 90 になったら空中要塞 I-162 へ来て。待ってるから。

richard_A:あ、おいつ。Pink † Pandora !

黒い戦闘機は飛び去った。

レベル 90 になったら、だと……。今のレベルは 75。あと 15 くらいあつという間だ。

気流計を意識して操作すると、すぐに飛行能力も上達した。もうプテラノドンは簡単に墜せるようになり、小型のドラゴンも追跡できた。

やがてレベルは 80 になった。空飛ぶ円盤や原子爆弾を抱えた巨大クラゲと戦い、大型ドラゴンをも撃墜すると、とうとうレベル 90 に達した。

空中要塞 I-162 で Pink † Pandora の黒い戦闘機と再会した。

richard_A:なあ Pink † Pandora……君はいつからこのゲームにいるんだ？

Pink † Pandora:そんな話をしにここへ来たの？

richard_A:いや、だけど……。

Pink † Pandora:私たちはチームでしょう？

richard_A:ああ、そうもちろん。

Pink † Pandora:これから敵を撃ちに行くのよ。

richard_A:うん、そうだな。行こう。

Pink † Pandora:空中山脈と呼ばれる大きな岩塊が幾つも浮かんでいる空域があるの。そこに大きな青いドラゴンがいるわ。それが私たちの終端標的よ。

richard_A:よし、やろう。おれたちでそいつをやるんだ。

richard_A と Pink † Pandora の戦闘機は並んで空中要塞を発進した。

richard_A の機体にはバルカン砲の弾丸を積めるだけ積んでいた。Pink † Pandora の機体はバリアを限界まで強化していた。耐久力の強い大型ドラゴンには、エネルギー消費の早いレーザーより長時間攻撃のつづけられるバルカン砲のほうが有利だった。そこでバリアで耐久力を上げた Pink † Pandora の機体がドラゴンからの攻撃を防ぎ、その間に richard_A がバルカン砲で攻撃をしつづけるという作戦だった。

空中山脈が近づいてきた。その中を飛行する銀色に輝く戦闘機の四機編隊が見えた。青いドラゴンを追跡していた。

richard_A:先客がいるようだぞ。

Pink † Pandora:あの人たちでは勝てないわ。

その言葉どおり、銀色の四機はドラゴンの吐き出すブーメラン型の光につきつき撃墜されていった。

Pink † Pandora:このまま接近する。攻撃用意！

richard_A:了解。

richard_A は思い切り近づいてバルカン砲を発射した。狙いは頭部に集中する。山脈の付近は風が強く機体が安定しないため、命中率は低かった。当たった弾丸もドラゴンの身体をつつむバリアで跳ねかえされていた。

ドラゴンが振り向いてブーメラン形の光を放ってきた。

Pink † Pandora の機体が前へ出て自分から攻撃を受け止めた。

すぐに richard_A が前へ出てバルカン砲による攻撃を再開する。二機はテンポよく位置を入れ替わり攻撃を続けた。

Pink † Pandora:あと少し、墜とせるはず。

その時、richard_A の機体が乱気流に巻き込まれ大きく高度を落した。高度を回復するまでの間、Pink † Pandora だけがドラゴンの攻撃を受けつづけ、とうとうバリアを失い爆発してしまった。

バリアを装備していない richard_A だけではどうにもならなかった。

空中要塞へ帰投すると、復活した Pink † Pandora が待っていた。

richard_A:すまなかったな。おれが乱気流に巻き込まれたせいで。

Pink † Pandora:仕方がないわ、あの気流では。

richard_A:どうする、もう一度いくか？

Pink † Pandora:ええ、作戦は正しかった。次は必ず墜とせる。

richard_A:そうだな。

Pink † Pandora:行くなら早いほうがいいわ。ドラゴンがまだダメージから回復していない可能性もある。

二機は同じ装備でふたたび空中山脈へ向かった。

青いドラゴンは姿を隠していて、すぐには見つからなかった。しばらく捜索をつづけると狭い谷間に身を潜めているのを発見した。

谷の稜線に沿うように降下しバルカン砲弾を叩き込んだ。

ドラゴンは上昇しながら光のブーメランをつづけざまに発した。

richard_A:まるで怒り狂ってるようだ。

Pink † Pandora:ダメージがある証拠よ。撃ちつづけて。

richard_A は攻撃をつづけるうちに山脈沿いの気流がだんだん読めるようになってきた。命中率も上がっている。ドラゴンからの攻撃は Pink † Pandora が確実に防いでいた。これならばいけそうだ。

だが、攻撃を防ごうと Pink † Pandora の機体が前へ出た途端、彼女の黒い戦闘機は乱気流に吞まれ高度を落してしまった。

光のブーメランがまともに richard_A の機体に迫ってきた。何とか急旋回でかわした。しかし二発目は避けきれず、翼を破損した。機体が激しく震動しだした。高度を保つのがやっとだった。そこへ次の攻撃が来た。避けられない！

そう思ったとき、黒い機体が危険なほど近接して光を受け止めた。Pink † Pandora が上昇気流をつかみ高度を回復してきたのだ。

richard_A は照準が定まらないままバルカン砲を撃ちつづけた。ほとんど当たらない。

ドラゴンの攻撃を受けた Pink † Pandora の機体が爆発した。もうバリアのエネルギーが切れていたのだ。だが、完全に破壊されたわけではなかった。ドラゴンも攻撃力が弱まっているらしい。Pink † Pandora の機体は煙を吹きながら高度を下げていった。それをドラゴンが追っていった。とどめを刺すつもりのようなのだ。

richard_A はドラゴンを狙った。機首を下げるとますます振動が激しくなる。トリガーを引く。被弾したドラゴンの身体から血が飛び散っているのが見えた。バリアが消えている。あと一撃、頭部に当てられれば。残弾も残りわずかだ。

ドラゴンが落下する Pink † Pandora に追いつく寸前、richard_A はバルカン砲を放った。ドラゴンの頭部が砕け散った。

青いドラゴンが爆発した。モニターが異様な光につつまれた。

「な、なんだ、この光は!？」

……

気が付くと秋典は、パソコンのキーボードに顔を押し付けるような恰好で寝ていた。身体を起こそうとすると背骨が痛い。

画面を見ると〈「カオス・クロラ」は現在サーバ・メンテナンス中です。しばらくお待ちください。〉と表示されていた。

そうだ、おれは、Pink † Pandora と一緒に青いドラゴンを追って……。

一体何時間ゲームに熱中していたのだろう？

床を見ると菓子パンやスナック菓子の空袋が大量に散らばっていた。全く意識しないうちにこれだけの

ものを食べ散らかしていたのか。

そういえば前にコンビニに行ったときは午後3時と午前3時の区別が付かなくなっていて、真剣に将来について考えなおさないとまずいと思ったはずだったが、いつの間にかゲームを始めてしまっていた。

これも、やりつづけると気が狂うと言われる「カオス・クロラ」のせいだろうか。

鬱になると言われるのは、単にゲームと相性が悪い者がそう言っているのだろうと思っていたのだが。

Pink † Pandora どうしているのだろうか？ 不意にそのことが気になった。

もう一度あのネット上の画像を見たくなくなった。それに見落としている情報もあるかもしれない。そう思ってまずポータル・サイトを開いた。新着メールが一通あると表示があった。メーラーを立ち上げると、メールの差出人はPink † Pandora だった。

文面は次のようなものだった。

〈richard_A 様。突然こんなメールを送って驚かせてしまったらごめんなさい。あなたに直接会ってお話したいのです。もしよかったですら下記の住所まで訪ねてきてくれませんか。私はいつでも家にいます。〉

翌日、秋典は朝から身だしなみを整え、一張羅を着こんで外出した。コンビニより遠くへ足を伸ばすのは、本当に久しぶりだった。

まず、新宿へ出て埼京線に乗った。Pink † Pandora からのメールには埼玉県の聞いたこともない市の名前が記されていた。地図で調べるとずいぶん山奥のようだった。

疑惑を感じないわけではなかった。ネットで話題の美少女からいきなり自宅に招かれるなんて。しかし、秋典と彼女のゲームの中での付き合いは短い期間ではない。

メールには本名も電話番号も記されていなかった。そのぶっきらぼうさは確かに彼女らしかった。それに行かなければ、いつまでも、もし行ったらどうだったのか、と気にしつづけることになるのは目に見えていた。万一、失望させられることになったとしてもゲームと手を切るいい機会になるだろう、そう思って秋典はPink † Pandora の家を訪ねてみることに決めた。

JR の駅を出てバスに乗った。山の中の停留所で降りてさらに歩かねばならなかった。一時間以上も山道をさまよい歩くことになった。こんな所に人が住んでるわけがないと確信しはじめたころ、少し先に民家らしきものが見えた。

近づいていくと、茂みの中に数羽のカラスが集まって、奪い合うように何かをついばんでいるのが見えた。犬の死体でもあるのだろう。

その家は二階建ての洋風の民家で、僻地商法にだまされた都会人がむりやり建てた別荘といった感じだった。周囲は雑草に覆われていたが窓には明るいグリーンのカーテンがかかり、屋根にはパラボラ・アンテナが見えた。どうやら人が住んでるらしい。郵便ポストに小さな紙切れが貼り付けられていて、そこに〈Pink † Pandora〉と、殴り書きのような文字で書かれていた。

「ふむ、確かに彼女の家だな」

秋典はインターフォンのボタンを押した。

しばらく経ってから、受信状態の悪いラジオのようなノイズとともに「どなた？」という、かすれた囁き声が聞こえた。

「網野です」

「ア、ミ……ノ？」

本名を知らせていないことに気づいて言い直す。「あ、リチャード A ですけど」

「入ってください」

自動でロックの外れる音が響いた。

ノブを回すとドアが開いた。

玄関を入ると正面は白熱灯が点された廊下だった。

すぐ横のドアが開いた。あらわれたのは車椅子に乗った少女だった。

あのネットの画像で見たとおりの美少女だった。

彼女はタートルネックのセーターを着て、その上に分厚いガウンを羽織っていた。風邪でもひいているのかずいぶん厚着で、顔も青褪めて見えた。

「あの、き、君が……」

少女はかすかにうなづいて、モーター駆動の車椅子を後退させた。

秋典も後について部屋へ入った。

「座っててください」彼女は囁くように言うと器用に車椅子を切り返して部屋を出て行った。

そこはソファが二つと小さなテーブルがあるだけのリビングだった。床は板張りで窓にはグリーンのカートンがかけられていた。間接照明なので薄暗い感じだ。部屋の半分ほどがカーテンで仕切られていて、その奥に何かあるのかわからなかった。

テーブルの上にはペットボトルのコーラとポテトチップが用意されていた。

秋典は急に喉の渇きをおぼえ、コーラをもらうことにした。キャップを開けて一口飲んだ。

「うえ」

まったく冷えてない、生温かった。

しばらくおとなしく座っていたが、彼女は戻ってくる様子がなかった。

彼女は一人暮らしなのだろうか。いや、車椅子で生活しているとなると、そういうわけでもないのだろう。それにしてもこんな山奥で……。何か事情があるのだろうか。

部屋を仕切っているカーテンが、かすかに揺れているような気がした。

秋典は立って、カーテンの奥を覗いてみた。

そこにあったのは、大きなスチール製の棚で、中にはパソコンに入っている基盤のようなものが大量に詰め込まれていた。ところどころで作動状態を示す発光ダイオードが点滅していた。カーテンが揺れたのは空冷ファンが回りだしたためだった。下の段には見慣れない金属製の円筒がいくつも接続されていた。HDDタワーの一種だろうか。

「すごいな、サーバーでも運営してるのか？」

その時、廊下のほうからガンガンと壁を叩くような音が聞こえた。

秋典がドアから顔を出してみると、少女の乗った車椅子が廊下に真横にはまり込んで激しく前後に動いて壁に激突していた。

「だ、だいじょうぶかい!？」

秋典は駆け寄って車椅子を止めようとした。取っ手を掴むと向きは変えられたもののモーターは止まらず奥の壁に向かって直進していった。

「あっ、ちょっと！」

車椅子は壁にぶつかって横転した。少女の首が床に転がった。

「え!? く、首が……」

よく見ると片方の手首も外れて床に落ちている。秋典は少女の頭部を手にとった。

「に、人形……なのか？」

それはマネキンや蠟人形にしてはあまりにも精巧すぎた。だとしたら一体これは……!？」

秋典は少女の頭部をそっと床に置いた。倒れた身体のセーターの首の部分には、金属製のフレームと小さなスピーカーのようなものが見えた。

一体この家はどうなっているのだ。

廊下の奥のドアの向こうで何かが動く気配がした。大きな翼が羽ばたくような音が聞こえる。

「だ、誰かいるんですか？」

秋典はドアを開けた。

「うわあぁっ！」視界を黒い影が覆った。

……

冥王星をユゴス星と呼ぶものたちによって、秋典の脳は身体から取り出された。それは今、金属製の円筒に収められユゴス星に保管されている。

秋典のデータは電子頭脳にコピーされ六本足で歩く戦車に搭載された。異星の荒野で戦争をするために。破壊されてもコピーなので何度でも復活できる。

Pink † Pandora:richard_A。調子はどう？

richard_A:上々だ。いつでも戦える。

Pink † Pandora:では、作戦を指示するからよく聞いて。敵は浮遊するポリプ状生命で……

お気に入りのゲーム
<http://p.booklog.jp/book/40631>

著者：小倉蛇

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/snake-o/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/40631>

ブックログのpapier本棚へ入れる
<http://booklog.jp/puboo/book/40631>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社 paperboy&co.